

住民組織による内発的集落づくりの開始要因に関する考察 — 福島県伊南村大桃地区を事例として —

Study on Commencement Factors of the Endogenous Revitalization of a Settlement by the Residents Organization
- The case of Omomo District in Ina village, Hukushima Prefecture -

劉 鶴烈*
Hag Yeol YOU

千賀 裕太郎**
Yutaro SENGA

1. はじめに

山間地域は、依然として過疎化・衰退化が進んでおり、地域の活性化に重要な役割を果たすと考えられる住民組織が、過疎化・衰退化とともに弱体化および消滅しつつあることも山間地域社会の大きな問題の一つとなっている。

本稿では、住民主体により「内発的集落づくり」^{注1)}が開始されてから1.5年しか経過してない大桃地区の事例調査により「内発的集落づくり」が立ち上げられた要因を考察することを目的とした。

注1) ここで言う「内発的集落づくり」とは、地域が抱えている諸問題を地域住民が認識し、問題の解決に向けての方策を住民合意で企画する。そして、住民自らの意思、意志で地域資源を有効に活用して、地域をより活性化するための集落づくりをいう。

2. 調査対象地の概要および調査方法

2-1 調査対象地

伊南村は福島県の西南部、南会津郡の西部に位置し、村の総面積は、153.13 km²でその約94%が山林・原野である。村の中央を伊南川が南北に貫流しており、その川に沿って12の集落(地区)が点在している。

本調査の対象地になっている大桃地区は、伊南村の中心部から最も離れている集落として、55世帯181人(2000年4月現在)が住んでおり、兼業農林業とサービス業(民宿・旅館業)が主な地域産業である。

2-2 調査方法

2001年10月から2002年3月にかけて聞き取り調査(延べ4回、12日間)を実施した。調査対象者は区長や住民組織リーダー、一般住民である。

3. 調査結果

3-1 大桃地区の住民組織の概観

大桃地区では、1970年代から1980年代にかけて急激な若者の他地域への流出などにより、住民組織の弱体化が進んできた。

しかし、近年、新しい住民組織の結成(心のふるさと創造実行委員会:2001年結成)や既存組織(とくに老人会)の活発化により、住民組織の活気が戻り始めている。

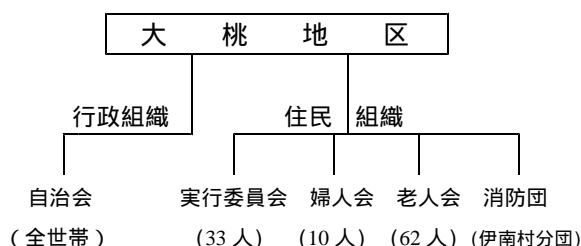


図1 大桃地区の集落内組織構造

聞き取り調査により作成

図1のように、現在、大桃地区では、自治会という行政組織と心のふるさと創造実行委員会(以下、「実行委員会」という)、婦人会、老人会、消防団、といった住民組織が結成されている。主な活動は集落の年中行事の管理、運営や集落の祭り・イベントの企画、実行などである(表1)。

表1 大桃地区の住民組織の主な活動内容

* 集落の年中伝統行事の管理、運営	* 集落の共同施設掃除
* 集落のまつりやイベントなどの催し企画、実行	* 組織の会員間の交流
	* ボランティア活動
	* 村のまつりの手伝い

聞き取り調査により作成

* 東京農工大学大学院連合農学研究科 (United Graduate School of Agricultural Science, Tokyo Univ. of Agr. and Tech)

** 東京農工大学農学部 (Faculty of Agriculture, Tokyo Univ. of Agr. and Tech) 内発的発展、住民組織、地域資源

表2 大桃地区における内発的集落づくり展開内容(2001年)

地域資源	集落づくり目的	集落づくり展開(計画)内容	関連住民組織	
大桃舞台 (国指定重要文化財)	住民に地域に対する愛着心や誇りを甦らせる 集落の情報発信拠点	秋のイベント開催：歌舞伎や管弦楽上演、各種講演会 集落住民の交流の場に活用	企画	実行委員会
			実行	実行委員会
			協力	老人会、消防団
高畑 スキー場	スキー場の年中活用 住民に新たな職場を与える 都市と農村の交流 若者の地域定着	春季：植花、植菌体験 夏季：フラワーパーク 秋季：キノコ園、収穫祭 冬季：雪の祭典	企画	実行委員会
			実行	実行委員会、老人会
			協力	婦人会
伝統的 技術・蔵	新しい地域産業創出 地域特産品開発 地域経済の自立	手造り味噌品評会 伝統的手法による味噌を生産、販売(企画中)	企画	実行委員会
			実行	実行委員会、老人会、婦人会

聞き取り調査により作成

3-2 内発的集落づくりの展開

ここでは、2001年5月に大桃地区住民自らの意志で結成された住民組織「実行委員会」を軸にして行っている「内発的集落づくり」への取り組み内容を分析する。

この地区では、実行委員会、婦人会、老人会といった住民組織が主体になって大桃舞台、高畑スキー場、伝統的技術、蔵などの地域資源を利活用することにより集落づくりが展開されている。(表2)

「内発的集落づくり」の第一歩として、まず伝統的な文化財である「大桃舞台」を復活し、歌舞伎が再演(2001年9月)されることで集落住民に地域の愛着心や誇りを甦らせた。そして冬季に限られて利用されてきた地区内のスキー場を春から秋の間にキノコ園、フラワーパーク(企画中)など年中利活用することにより地域の活性化を図っている。さらに、伝統的な手造り味噌技術と蔵、地元の大豆を利用し、新しい地域産業の創出に向けて動き始めている。

4. 考察

ここでは、「内発的集落づくり」が立ち上げられた要因を考察する。

(1) 集落の過疎化や衰退化に対する危機意識と住民の自覚

大桃地区は、農林業の不振やスキー場の不況による地域産業の沈滞や依然とした若者たちの域外流出や高齢化の進行(高齢化率34%)による過疎化などが集落の課題として懸念されていた。しかし、近年、厳しい状況に置かれている集落の現実に対する危機意識が住民の間に広がり、集落の活性化に向けて住民自らの自主的、

自治的な集落づくりへの意志が徐々に始まった。このような危機意識と住民の自覚が「内発的集落づくり」を立ち上げた根本的な要因であろう。

(2) 若年層の地域リーダー登場

この地区では、20～30年前、集落の行事の管理・運営に中核的な役割を果たしてきた青年会と若者が消滅した。その後、それらの役割は自治会を軸にした集落の長老層に移った。

長老層の保守的、閉鎖的な集落運営に疑問や未来志向的な意識を持った若者の登場によって長老層の権限が薄くなりつつあり、住民の間に青年層への期待感があつた。若年層リーダーの活躍で新たな中間リーダー層が形成されるようになり、これが「内発的集落づくり」を立ち上げる推進力となった。

(3) 活発なコミュニティと地域への愛着

大桃地区では、以前から活発な住民の間の交流や根強い団結心、そして地域に対する愛着心が今までも維持、形成されている。

このような高い地域共同体意識が「内発的集落づくり」を展開しやすい条件を形成していると考えられる。

(4) 適切な行動提起「大桃舞台の復活」

大桃住民の意識のなかでは、約20年前、中断された「大桃舞台」に対する享受心とともに復活への要望が強かった。そこで、若い地域リーダー層の主導で「内発的集落づくり」の始発点として行った「大桃舞台」の復活が成功され、地域住民の若いリーダー層への信頼度が高くなり、「内発的集落づくり」に前向きに考えるなど意識の変化をもたらした。